

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34407

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02051

研究課題名（和文）インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合

研究課題名（英文）Reintegration of Indonesian Migrant Workers After Returning Home

研究代表者

中谷 潤子（Nakatani, Junko）

大阪産業大学・国際学部・准教授

研究者番号：20609614

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、移住労働のち帰還したインドネシア人の新たなライフステージ構築注目した。インドネシア人移住労働者に帰国後について尋ねると、決まって「ビジネス」と言い、それは「Buka kantin（食堂を開く）」を指す。なぜそれしか言わないのか。更に家族をおいて海外に働きに出ること、親の帰還後の家族の在り方についても調査した。研究成果として得たのは、「自律/自立」というキーワードである。新たなライフステージの構築も、「自律/自立」なくしては成り立たず、残された家族についても「自律/自立」がキーワードとなろう。そしてそれは、移住労働だけでなくインドネシア社会全体の問題につながる事がわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

移住労働は世界中に広がり、増加する一方である。そしてこれまで、受け入れ側の問題、そして移住労働者の移住先でのトラブルなどに多くの関心が寄せられてきた。しかし、移住労働者は帰還後、地元で新たなライフステージを構築できているのか。できないから、再び移住労働をするのではないか、そう考え臨んだプロジェクトだった。しかしそこには移住労働者を取りまく環境、様々な社会的な問題が絡んでいた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the reintegration of Indonesian migrant workers by investigating the process by which Indonesian migrant workers move on to a new stage in their lives in Indonesia after their return. Indonesia has nearly 300,000 workers going abroad every year since the mid-1980s. On the other hand, few studies have paid attention to the return of 200,000 Indonesian workers each year.

Therefore, we focused on how Indonesians who returned after migrant labor constructed a new life in Indonesia. When we asked them what they would do when they returned to home, they always said "Starting a business". And when asked what kind of business, they were saying, "Open a restaurant". I was wondering why everyone was saying that. The survey sites were continuously investigated the new lives of return migrant workers. As a result, we became keenly aware of the "autonomy" needed to build a new life after returning.

研究分野：地域研究

キーワード：再統合 移住労働者 インドネシア

1. 研究開始当初の背景

人の移動がますます盛んな現代において、人の国際移動についての研究も、移民や難民、そして労働者の移動についてなど様々である。中でも海外への移住労働者を対象とした研究は多く、特にアジア地域では、送り出し国第一位であるフィリピンについて、海外労働者の中心である家事労働者を対象に小ヶ谷(2016)をはじめとし、日本でも多くの研究者が長きにわたって調査を行っている。インドネシアの労働者送り出しは、1980年代半ばから毎年30万人近くにのぼり、現在では東南アジアにおいて第2の送り出し国である。80年代からは家事労働に従事する女性を中心に、就労先は、アジア、中東、ヨーロッパと世界中に広がっている。

インドネシア人の移動についても、労働者について(平野2014ほか)そして日本のインドネシア人について(奥島2009)などがある一方、インドネシア人労働者の帰還後に注目した研究は多くはない。インドネシア人技能実習生の帰還後に関する研究があるが(山口2015)個人の海外労働経験から人生の次のステージへの結びつきに着目した研究は管見では見当たらない。

研究代表者は、香港や台湾でインドネシア華人の移動についての研究調査を行った際に、現地でのインドネシア人家事労働者に接触する機会が何度もあった。その際、彼女らの現地での生活(言語使用を含む)や帰還後の再統合に関心をもち、2016年8月のインドネシアでの予備調査の際に東ジャワ州で元労働者3人に聞き取り調査を行った中で、移住労働前とは一変した人生を歩む女性たちを知り、人生における移住労働の意味や意義について検討する必要性を感じた。日本のメディアでは、インドネシアについては首都の発展や経済成長、人々の生活水準の上昇ばかりが取り上げられる。しかし依然として地方は都会とは格差があり、その生活も20年前、30年前と大差ない。しかしそのような地方においても、自らの人生を自らの力でステップアップさせる個人を生活から見つめ、彼ら自身の「語り」からその人生構築を描き出したいというのが本研究への着想に至った経緯である。

2. 研究の目的

本研究は、インドネシア人移住労働者が帰還後にインドネシア社会で人生の新たなライフステージを築いていく過程について、フィールド調査をもとに検討することで、移住労働者の再統合を明らかにすることを目的とした。移住労働者研究では移住先での課題の指摘が主流を占める中、労働者の帰還後を調査対象とし移住労働者をめぐる長期的な視野を提供することで、日本における海外からの労働者受け入れ政策にも一石を投じることができると考える。本研究では、主に東ジャワ州の多くの帰還労働者によって構成されている集落で、インドネシアからの移住労働の実態から帰還後のネットワークづくりや新たなビジネスへの着手など元労働者たちの再統合のプロセスとそのための交渉について分析することとした。

研究代表者は、これまでライフストーリー研究を中心として行ってきたため、元労働者自身の「語り」からストーリーを編むことに特に関心を持った。しかしながら、帰還後の再統合という社会参加をとらえるのは、個人というミクロな視点だけではなく、コミュニティ、社会そして国から国への移動というマクロな視点からの分析も必要だと考えた。そのため、ミクロ分析としてライフストーリー収集、帰還後のライフステージ構築の過程、マクロな視点の分析としては、労働者の移動の流れについての検証、女性の再統合についてと帰還コミュニティの分析を行い、これら双方の視点を重ね、さらには先行研究をもとにインドネシア以外の地域の状況との比較検討を行い、調査結果を包括することとした。

実際にはフィールドの観察調査によって、帰還後の再統合をめぐる交渉の実態を明らかにすることを中心とする。もしその労働経験を「辛い経験」として終わらせない「たくましさ」をとらえることができれば、海外移住労働に対するステレオタイプなイメージを覆し、移住労働の新たな可能性に言及することもかなう。再統合には、文化的再統合(文化的価値観等の再受容)、経済的統合(経済システムへの編入)、社会的再統合(人的ネットワークの創出など)の3つがあるが、予備調査で文化的再統合への葛藤が見られなかったことから、本研究では特に経済的及び社会的再統合に焦点をあてたいと考える。

3. 研究の方法

インドネシア人移住労働者の帰還後の再統合について、社会及びコミュニティ単位に見るマクロな視点と個人のライフステージ構築というミクロな視点の両面から見ていく。そのため、研究は観察と聞き取りを同時に行いつつ、分析については担当を分ける。具体的には聞き取り調査から個人のライフストーリーを描き出すことが一点と、現地観察調査と聞き取り調査から移住労働の全体的な潮流と動態を把握することがもう一点である。2年にわたる現地調査で詳細な事例を収集し、担当別に分析を進め、最終年度はフォローアップと成果の発信が主となる。最終的には、再統合の動態の検証により、日本社会の外国人労働者受け入れ体制についてまで議論し、提言を行えるようにしたいと考えた。

ミクロな視点としては、個人へのインタビュー調査から各人のライフストーリーを描き出す。やまだ(2000)によると、ライフヒストリーは生活史、ライフストーリーは人生の物語と捉えられる。ライフヒストリーは人類学などで多く用いられ、語りだけではなく「個人の記録などによ

って構成される個人の伝記のことである（桜井・小林 2005）。北村もライフヒストリーの収集を行ってきた。しかし、本研究では個人の伝記というより、あくまで「個人の経験と今」に着目するため、インタビューでの相互行為によるナラティブからストーリーを描き出すことにする。

また、労働者の移動と再統合というマクロな視点については、ジェンダー研究の視点から女性の労働者移動について広い知見をもつメンバーをリーダーに、東ジャワにおける女性を中心とした労働者の移動と帰国後の社会参加の動態を分析する。また、帰還コミュニティの形成や役割についても見ていくこととする。

さらに、これまでも調査研究をともにしてきた海外研究協力者は、心理学をベースとして、ジェンダー、エスニシティなどのマイノリティ研究に従事しており、現地調査への参加を中心に活動してもらった。なお、連携研究者は、フィリピンの移動労働者研究における第一人者である。そこで、インドネシアをフィールドとした本研究でも、フィリピン研究の視点から、アドバイスや提案をもらうなど研究会などでの発表を中心に加わってもらうこととした。

フィールドとしては、スラバヤから車で数時間のところにある東ジャワ州の kampung（集落）が中心となった。この地域には、多くが海外に労働に出かけ、一つの集落がほぼ帰還者で構成されている集落がいくつもみられる。また、行先もマレーシア、台湾、香港と様々であり、それぞれに異なった移住労働体験が聞けるのではないかと考えた次第であった。更にメンバーはジャカルタを中心に調査を行った。もちろんジャカルタ出身の移住労働者ではない。帰還後、ジャカルタで新たな人生を歩み始めた元移住労働者とそこに生まれた組織を追った。

4. 研究成果

2017年度より共同調査そしてメンバー個々の調査を行ってきた。調査地は、首都ジャカルタと西ジャワ、そして東ジャワである。

研究代表者は、東ジャワ州の帰還移民の多い集落での自助組織の活動を継続的に追い、インタビューを重ねた。インドネシアはもともと女性自立支援のための様々なサポートがあり、それが集落自立をサポートする体制へと変化している。これらの組織に対する経年調査と「Aktivistr: 活動家」と呼ばれる支援者へのインタビューで、帰還移民の自立の困難さが浮かび上がった。移住労働者の多くは、いわゆる「田舎」と呼ばれる地方出身者が大半である。地元には農業以外の職はなく住民の学歴も低い。その日暮らしの生活を送ってきた人たちの多くは海外で稼いだ金を子どもの学費や当面の生活費に充てるのが精いっぱい、将来にわたって地元で暮らしているための資金とするというビジョンを持つこと自体を知らない。「自立」と言葉にするのは簡単だが、その意味の真の重さを思い知らされた結果となった。

そして移住労働者の家族とその支援についての調査も同じく、東ジャワ州にて行われた。残された家族にフォーカスを当てたユニークな組織の試みと家族の「声」を調査した。幼いころに親と離れ離れになってしまった子どもの中には、そのことが心の深い傷となり、非行に走ったりその後の親子関係がうまく築けないケースも多い。それを NGO を中心とした地域住民で支えている。子どもたちの居場所づくりは、そこに通う大人たちの居場所にもなる。それが地域の活性化に貢献しているケースもある。ここでも「自立」がキーワードとなるのだろう。

調査地は東ジャワ州に限らない。かねてより家事労働について研究を重ねてきたメンバーは、帰還移民の新たなステップアップの舞台となる首都ジャカルタでの調査を重ねた。移住労働者の再統合のかたちとして、ジャカルタでローカルな家事労働者になるという新しい潮流に目を向け、これまでステレオタイプ的に理想とされてきた「故郷で起業」ではない新たなライフステージとその要因について調査を行った。海外移住労働はもはや最高の収入を得る手段ではない。ジャカルタでの家事労働は、時として海外移住労働と変わらぬ収入を得ることができる。また、自国ということによるメリットもある。住み込みではなく通いで労働を選択すると、家族とともに生活することができ、前述のような問題からも解放される。

このように、元移住労働者の暮らす集落での帰還後の自立に向けた組織を中心とした取り組みの在り方、移住労働者の残された家族に対する支援、帰還後に都会で新たな労働を選択する新潮流、これらを明らかにできたことが本プロジェクトの成果である。しかしながら、マクロ的分析については十分とはいえない。ミクロな視点に目を向ければ向けるほど、マクロな視点の必要性を感じた。質的に追った組織や協力者の抱える問題は、インドネシア地方の問題、そしてそれはインドネシア全体の問題につながるものだったからだ。しかし、マクロへの関わり方が不十分に終わったことは本研究における反省点である。

最後に、この成果を科研の集大成としては、2019年12月に台湾で開かれた SEASIA にてパネルを組んで発表することができたことを付け加える。発表では、インドネシア調査に同行を頼んでいたリサーチパートナーもパネリストに加わり、フィリピンを中心とした移住労働に長年携わってきた研究協力者をディスカッサントとして、司会も合わせメンバー全員で行った。東ジャワ州での自助組織での活動家と組織メンバーとの取り組み、そしてジャカルタでの新たなライフステージについての発表に、聴衆からも質問やコメントが寄せられた。ディスカッサントからの、「持続可能な再統合プログラムが機能した場合、今後コミュニティの海外移住労働に影響は出るといえるか」「ジャカルタでの労働条件が今後変化していったとしても、人々は海外移住労働を選択するか」という問いとともに、「そもそも再統合をどう定義するか」という一言は、

本プロジェクトを経て、痛感したことであり、今後の研究の課題としたいと考える。

参考文献

- 小ヶ谷千穂.2016、『移動を生きる フィリピン移住女性と複数のモビリティ』有信堂
奥島美夏(2009)『日本のインドネシア人社会』明石書店
桜井厚・小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー』せりか書房
平野恵子.2011、「学歴のない女性がサウジに渡航するインドネシアの事情」『ASAHI 中東マガジン』(2011年9月1日)
山口裕子(2014)「東南アジアにおける労働力移動の社会人類学的研究：インドネシアの帰還移民の同胞リクルート動向を中心に」村田学術振興財団
やまだようこ(2000)「人生を物語ることの意味 ライフストーリーの心理学」やまだようこ編著『人生を物語る 生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房 1-38 頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Yumi Kitamura	4. 巻 54-1
2. 論文標題 Introduction to the Special Issue ; Re-Positioning China's and Taiwan's Migration in Southeast Asia. Finding Passages with Cultural Capital: New Dimension of Mobilities in East and Southeast Asia. Issues & Studies	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 A Social Science Quarterly on China, Taiwan, and East Asian Affairs.	6. 最初と最後の頁 1802001-1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1142/S1013251118020010	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 巻 54
2. 論文標題 「家族再結合」のリアリティ 台湾からカナダに移住したフィリピン人女性とその子どもたちの経験から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フェリス女学院大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 巻 63
2. 論文標題 「移民政策」を忌避する「移民国」日本 <サイド・ドア> 政策の限界を見据えるために	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アジェンダ・未来への課題	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 平野恵子	4. 巻 2018
2. 論文標題 書評 安里和晃編, 2018, 『国際移動と親密圏 ケア・結婚・セックス』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本フェミニスト経済学科誌 経済社会とジェンダー	6. 最初と最後の頁 137 - 139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平野恵子	4. 巻 702
2. 論文標題 「書評 ナイラ・カビール著 遠藤環・青山和佳・韓載香訳、『選択する力 バングラデシュ人女性によるロンドンとダッカの労働市場における意思決定』」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『大原社会問題研究所雑誌』	6. 最初と最後の頁 52,56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平野恵子	4. 巻 68-1
2. 論文標題 『技能化』の含意 インドネシアの移住・家事労働者とC189」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『北海道教育大学紀要 (人文科学・社会科学編)』	6. 最初と最後の頁 53,61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 巻 68
2. 論文標題 「ローマで働くフィリピン人男性移住家事・介護労働者の職業観とジェンダー 移動する家族の物語から考える」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『女性労働問題研究』	6. 最初と最後の頁 7,23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北村由美	4. 巻 14
2. 論文標題 「新刊紹介 Shu-mei Shih, Chien-hsin Tsai, and Brian Bernards eds. Sinophone Studies: A Critical Reader」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 華僑華人研究	6. 最初と最後の頁 85,88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北村由美	4. 巻 18-1
2. 論文標題 Long way home: The life history of Chinese-Indonesian migrants in the Netherlands.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Wacana: Journal of the Humanities of Indonesia,	6. 最初と最後の頁 24,37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 巻 47 5
2. 論文標題 フィリピンと日本から考える「人間のメンテナンス」 - 移住ケア労働に日本が求めるものとは	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想 (特集: 新移民時代 - 入管法改正・技能実習生・外国人差別)	6. 最初と最後の頁 101,111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 巻 32
2. 論文標題 移動とヴァルネラビリティ アジアの移住女性労働者を取りまく状況から考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報社会学論集 (関東社会学会)	6. 最初と最後の頁 44,51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中谷潤子	4. 巻 29
2. 論文標題 EPAインドネシア人看護師の滞日および帰還へのプロセス ライフストーリーより	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大阪産業大学論集	6. 最初と最後の頁 67,76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中谷潤子	4. 巻 21-7
2. 論文標題 移住労働者の帰還後のライフステージ - 元EPAインドネシア人看護師に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 86,89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平野恵子	4. 巻 24-6
2. 論文標題 インドネシア人移住・家事労働者を取り巻く『非・安全』な制度への取り組み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 20,23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 14件）

1. 発表者名 中谷潤子
2. 発表標題 インドネシア人移住労働者による帰還後の自立に向けた取り組み 東ジャワの2組織の事例
3. 学会等名 インドネシア研究懇話会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Junko Nakatani
2. 発表標題 "The potential of Indonesian migrant workers' linguistic resources"
3. 学会等名 The 1st International Conference on Applied Linguistics by Sekolah Tinggi Bahasa Asing in Indonesia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Junko Nakatani
2. 発表標題 “ Case Studies of Former Indonesian Foreign Labors in Javanese Villages; ”
3. 学会等名 Contextualizing Taiwanese & Chinese Presented in Southeast Asia and Southeast Asians in Taiwan – in Both Historical and Contemporary Perspectives At Chengchi University In Taiwan (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北村由美
2. 発表標題 インドネシア - キリスト教地域における性的マイノリティ
3. 学会等名 東南アジア学会第99回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yumi Kitamura
2. 発表標題 Sexual Minorities in Christian Context in Contemporary Indonesia
3. 学会等名 Workshop on Moral Politics of Nationhood: Constructions of Sexual, Political, and Religious Others in Contemporary Indonesia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chiho Ogaya
2. 発表標題 Migration and Care between the Philippines and Japan for the Past 40 years: Analysis through the Lens of Intersectionality
3. 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology, Toronto, Canada (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Keiko Hirano
2. 発表標題 Gig-economy and domestic workers in Indonesia
3. 学会等名 The 27th International Association of Feminist Economics (IAFFE) Annual conference, "Feminist Debates on Migration, Inequalities and Resistance" (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中谷潤子
2. 発表標題 インドネシア人元EPA看護師の帰国後のライフステージ
3. 学会等名 日本語教育学会2017年度第10回支部集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平野恵子
2. 発表標題 移住・家事労働者の連帯 インドネシアを事例として
3. 学会等名 国際ジェンダー学会2017年大会シンポジウム1 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小ヶ谷千穂
2. 発表標題 "Japanese Filipino Children (JFC) and Japan : Crossroads of Family, Nationality, Class and Migration"
3. 学会等名 International Symposium on Transnational Class and Citizenship, ILCAA/JSPS Research Project on Child Migration in Asia, Rikkyo University (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北村由美
2. 発表標題 Chinese Indonesians in the Catholic Charismatic Renewal Movement
3. 学会等名 International Workshop on Making Global Trajectories of Chinese Diaspora Studies in Asia
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北村由美
2. 発表標題 Re-recognition of Confucianism as a State Religion of Indonesia and Its Implications in Asian Context
3. 学会等名 The World Confucian Religion Congress (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yumi Kitamura
2. 発表標題 Sexual Minorities in Christian Context in Indonesia
3. 学会等名 SEASIA Biennial Conference 2019. Academia Sinica, Taipei, Taiwan (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yumi Kitamura
2. 発表標題 Activism in Sexual Minorities and Chinese Indonesians
3. 学会等名 Kyoto-Sydney International Workshop on Towards a New Nanyang Studies: Examinations of Tionghoa and Tsinoy beyond the "Sinophone" Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Junko Nakatani
2. 発表標題 Reintegration of Indonesian Migrant Workers: Some Findings from a JSPS Research Project
3. 学会等名 Seminar about Reintegration of Indonesian Migrant Workers : Indonesian Institute of Science (LIPI) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Junko Nakatani
2. 発表標題 The Role of Support Organizations for the Reintegration of Indonesian Migrant Workers
3. 学会等名 SEASIA Biennial Conference 2019. Academia Sinica, Taipei. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平野恵子
2. 発表標題 インドネシアの移住・家事労働者 出稼ぎ、都市化、組織化
3. 学会等名 日本フェミニスト経済学会2019年度共通論題，於北とぴあ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Keiko Hirano
2. 発表標題 Returning Home: When Indonesian Migrant Domestic Workers Become Local Domestic Workers
3. 学会等名 SEASIA Biennial Conference 2019. Academia Sinica, Taipei (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yumi Kitamura
2. 発表標題 Challenging the Borders of Religious 'Morality': Sexual Minorities in Christian Context in Contemporary Indonesia
3. 学会等名 5th International Conference on Urban Studies: Border, Transportation, and Space. Faculty of Humanities, Universitas Airlangga, Indonesia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Junko Nakatani
2. 発表標題 The potential of Indonesian migrant workers' linguistic resources
3. 学会等名 The 1st International Conference on Applied Linguistics by Sekolah Tinggi Bahasa Asing in Indonesia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 Maria Serena I. Diokno, Hsin-Huang Michael Hsiao and Alan H. Yang.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 NUS Press	5. 総ページ数 248
3. 書名 in Yumi Kitamura: The Re-recognition of Confucianism in Indonesia: An Example of China's Soft Footprint in Southeast Asia in "China's Footprints in Southeast Asia"	

1. 著者名 金子勇	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 344
3. 書名 変動のマクロ社会学 - ゼーション理論の到達点 (第6章 小ヶ谷千穂「日本社会の「国際化」と国際社会学方法論的ナショナリズムを超えて」)	

1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 292
3. 書名 『移民政策のフロンティア～日本の歩みと課題を問い直す』	

1. 著者名 北村由美、中谷潤子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 593
3. 書名 『華僑華人の事典』	

1. 著者名 Aurélie Damamme, Helena Hirata, Pascale Molinier	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Harmattan	5. 総ページ数 254
3. 書名 Le travail entre public, privé et intime Comparaisons et enjeux internationaux du care	

1. 著者名 Yoshikazu Shiobara, Kohei Kawabata, Joel Matthews	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 286
3. 書名 Cultural and Social Division in Contemporary Japan: Bridging Social Division	

1. 著者名 宮島喬・藤巻秀樹・石原進・鈴木江理子編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 藤原書店	5. 総ページ数 312
3. 書名 別冊『環』24号 開かれた移民社会へ (小ヶ谷千穂「呼び寄せられる子どもたち 「外国につながる子ども」をめぐる課題から、「家族再統合」を考える」pp.44-51)	

1. 著者名 坪井 健 横田 雅弘 工藤 和宏	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 360
3. 書名 ヒューマンライブラリー：多様性をはぐくむ「人を貸し出す図書館」の実践と研究	

1. 著者名 伊藤るり編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 392
3. 書名 家事労働の国際社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	平野 恵子 (Hirano Keiko) (50615135)	お茶の水女子大学・ジェンダー研究所・特任リサーチフェロー (12611)	
研究分担者	北村 由美 (Kitamura Yumi) (70335214)	京都大学・附属図書館・准教授 (14301)	

